

第1章 太宰府市の歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

(1) 位置

太宰府市は九州島の北端、福岡市の南東約16kmに位置し、南北東を山地に囲まれ、さながら盆地状をなし、その中央を御笠川水系が博多湾に向かって流れている。行政的には北部は糟屋郡宇美町、南から東部は筑紫野市、西部は大野城市に接し、東西7.8km、南北9.5km、面積は29.60km²。市庁舎の位置は、東経130°52'37"、北緯33°51'28"である。

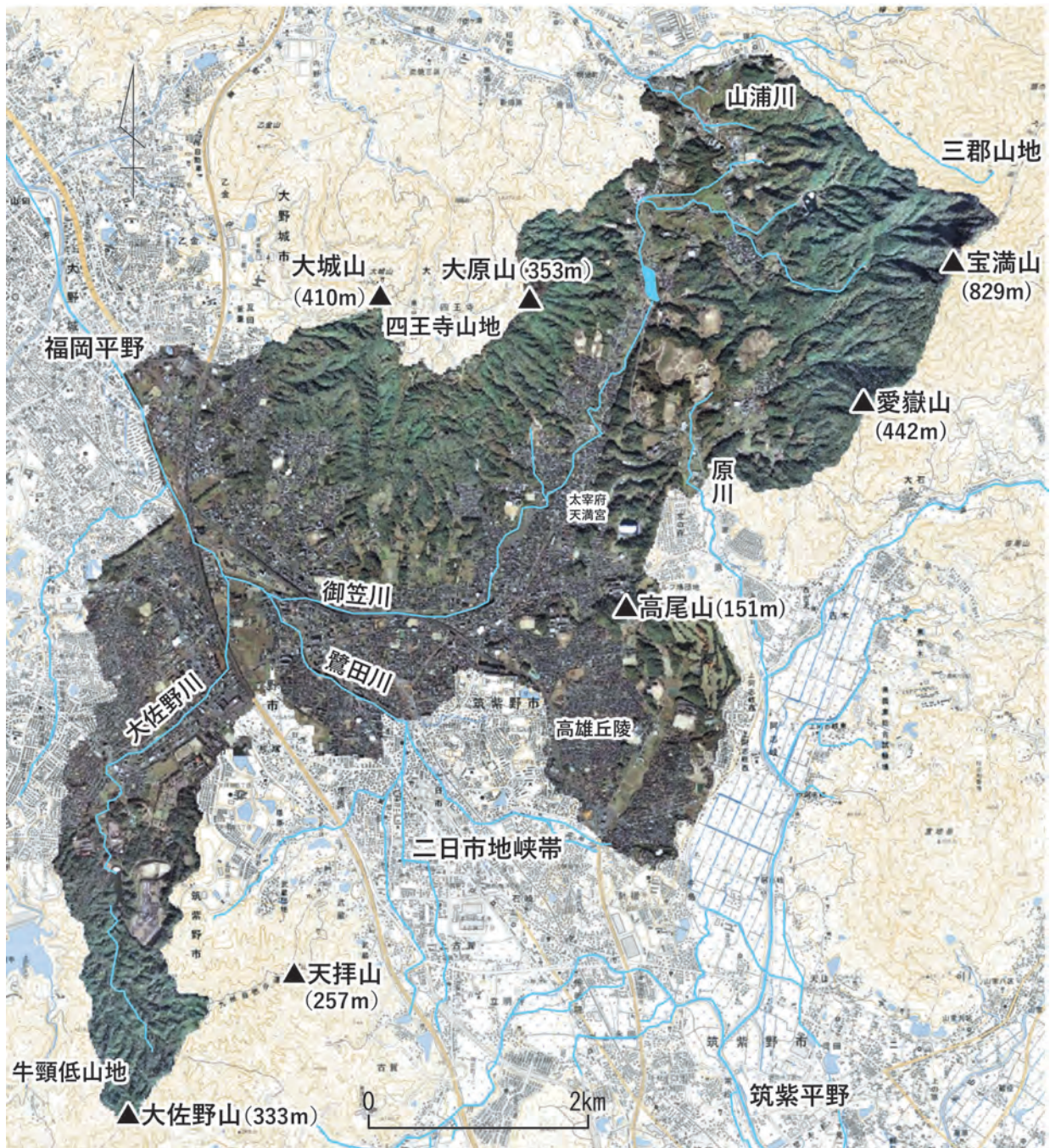


太宰府市の位置図

(2) 地形・地質・水系

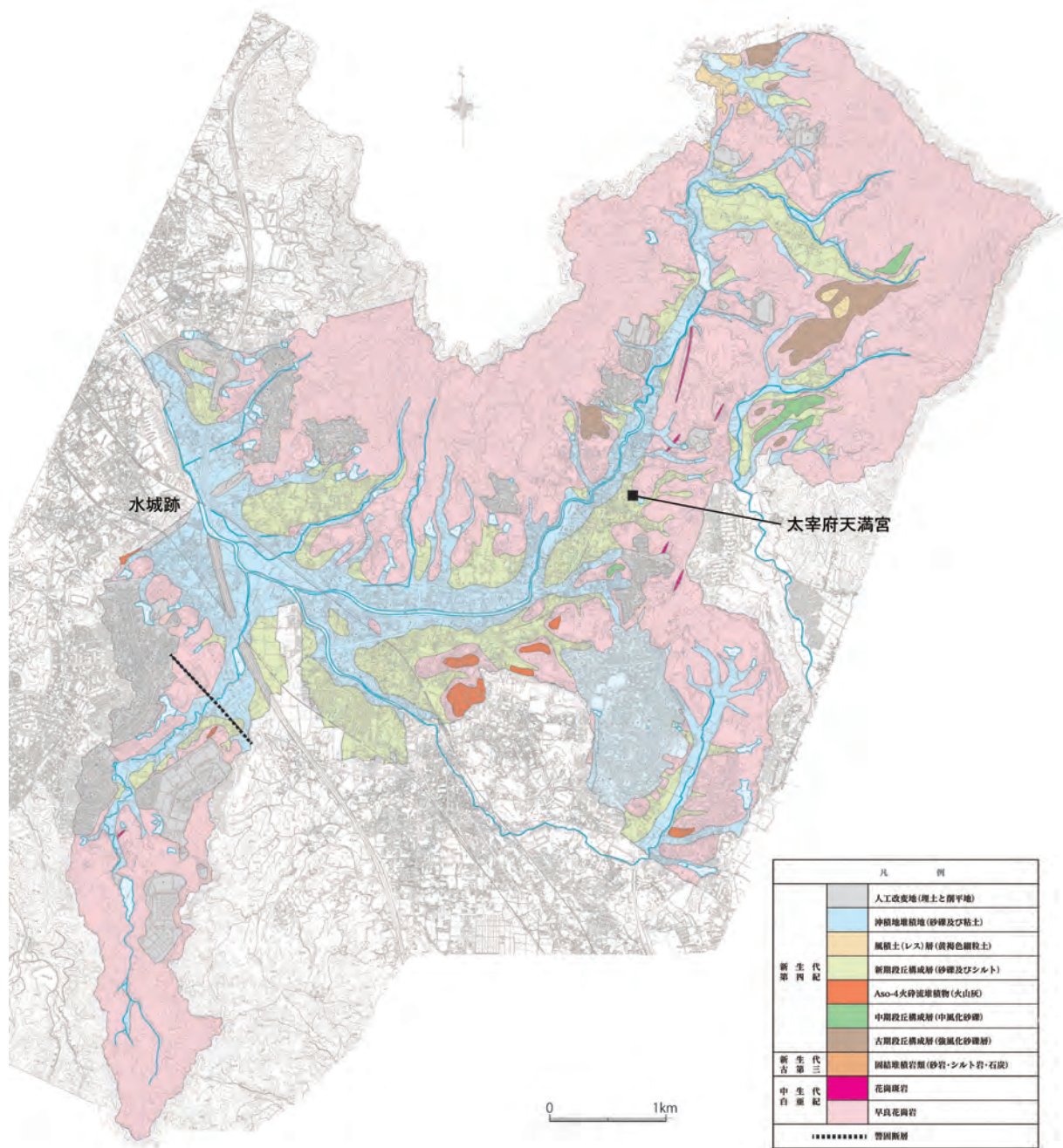
北に四王寺山（標高410m）、東に高雄丘陵をはじめ愛獄山から宝満山（829m）へと連なる三郡山地があり、狭長な二日市低地を挟んで、西を脊振山地の前山となる牛頸低山地（最高点333m）に囲まれている。三方を山に囲まれるが、北西側は福岡平野に、南側は筑紫平野に接し、北部九州と中南部九州を結ぶ交通の要地となっている。市域の大部分は博多湾に注ぐ御笠川とその支流の流域であるが、北部の山浦川は多々良川水系であり、四王寺山の北側を博多湾へ下る。東部の三郡山地と高雄丘陵との間は、宝満川を経て筑後川から有明海に注ぐ原川の流域である。これらの山地の山麓部は、基盤層である花崗岩が浸食され

て形成された丘陵や土石流の堆積によって形成された扇状地、および扇状地の下方浸食で形成された段丘地形が見られるが、昭和 40 年代以降、大規模な宅地化と土取りが進み地形の変化をもたらしている。



太宰府市の地形

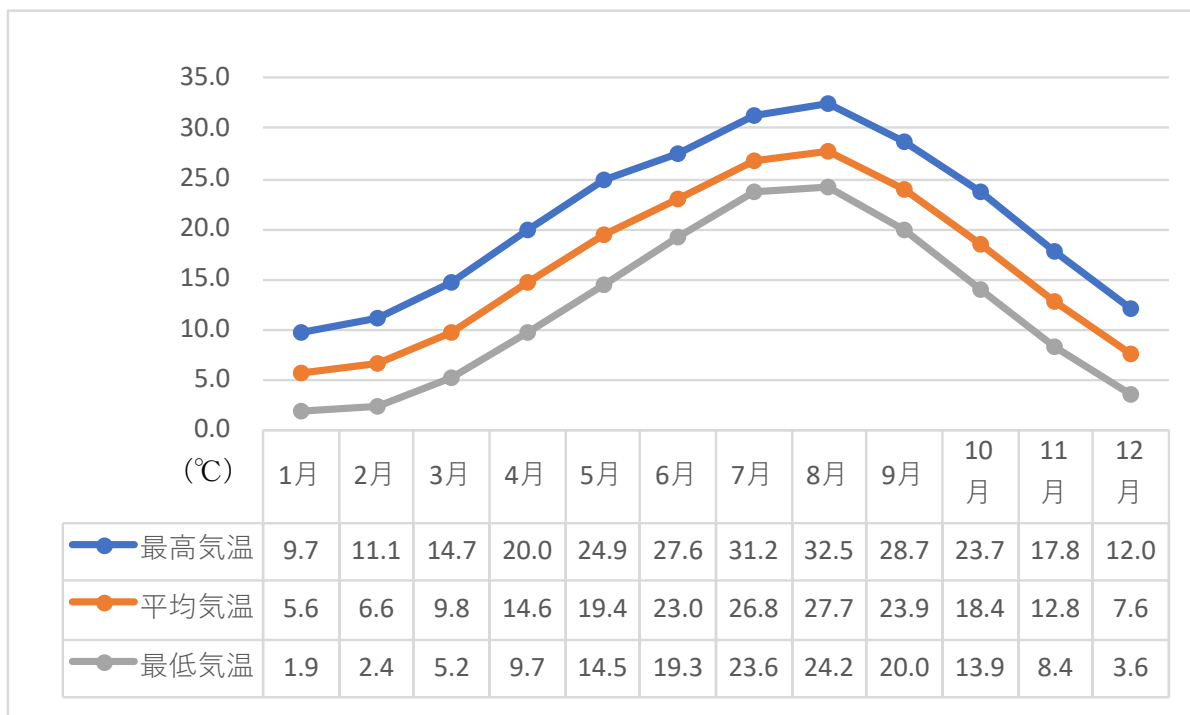
(背景に国土地理院発行 25000 分の 1 地形図「福岡南部」「太宰府」「不入道」「二日市」を使用)



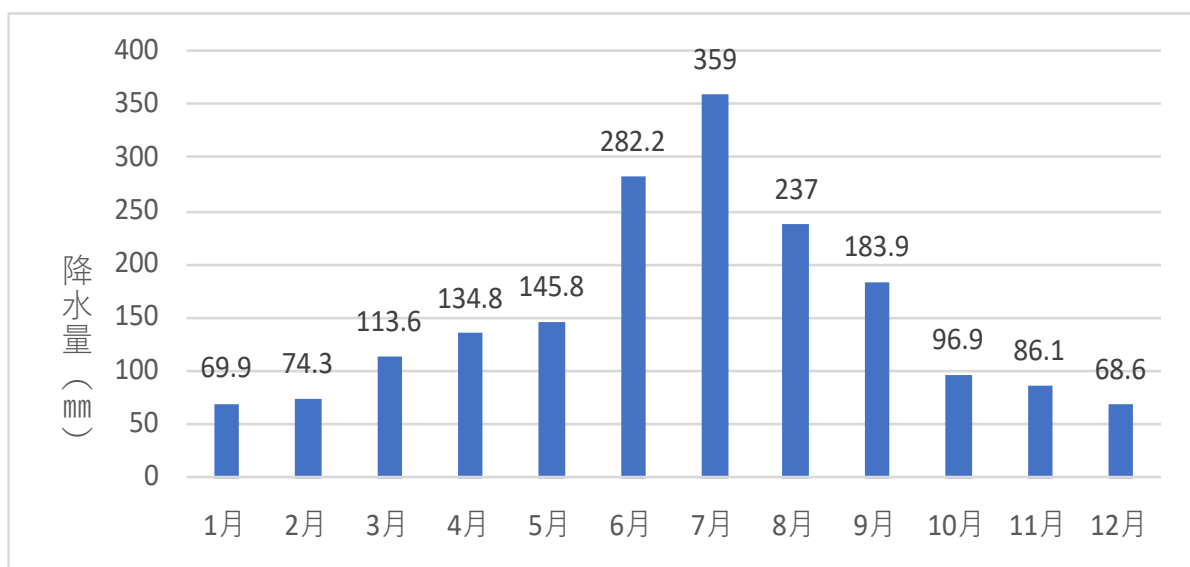
太宰府市の地質図 (資料:『太宰府市史 環境資料編』平成13年)

(3) 気象

気候は、北部九州から山口県にかけて分布する日本海型気候区に属するが、盆地状の地形から内陸型気候区に隣接している。よって、福岡市などの沿岸部と比べると年間平均気温は16.9℃（令和2年）とやや低めで、夏は暑く、冬は寒い気候となっており、夏場には県内最高気温を観測することもあるが、1月頃には市街地でも積雪がみられる。令和元年（2019）までの10年間の年間平均降水量は2,005 mmと沿岸部より多い傾向にある。



太宰府市の気温 （資料：気象庁、1991～2020年の平均値）



太宰府市の降水量 （資料：気象庁、1991～2020年の平均値）

2 社会的環境

(1) 市の合併経緯

現在の太宰府市域は、近世には12の村で構成されていたが、明治22年(1889)の町村施行により、北谷村、内山村、宰府村の3村が合併して太宰府村となった。同年、観世音寺村、坂本村、国分村、水城村、通古賀村、片野村、吉松村、向佐野村、大佐野村、の9村が合併し水城村となった。また、太宰府村は、明治25年(1892)に町制を施行し、太宰府町となった。昭和30年(1955)、太宰府町と水城村が合併し、新「太宰府町」となり、昭和57年(1982)に市制を施行し、太宰府市となって現在に至る。

町村合併の変遷

～明治21年 (1888)	明治22年 (1889)	明治25年 (1892)	昭和30年 (1955)	昭和57年～ (1982)
北谷村	太宰府村	太宰府町 ※町制施行	太宰府町	太宰府市 ※市制施行
内山村				
宰府村				
観世音寺村	水城村	水城村		
坂本村				
国分村				
水城村				
通古賀村				
片野村				
吉松村				
向佐野村				
大佐野村				



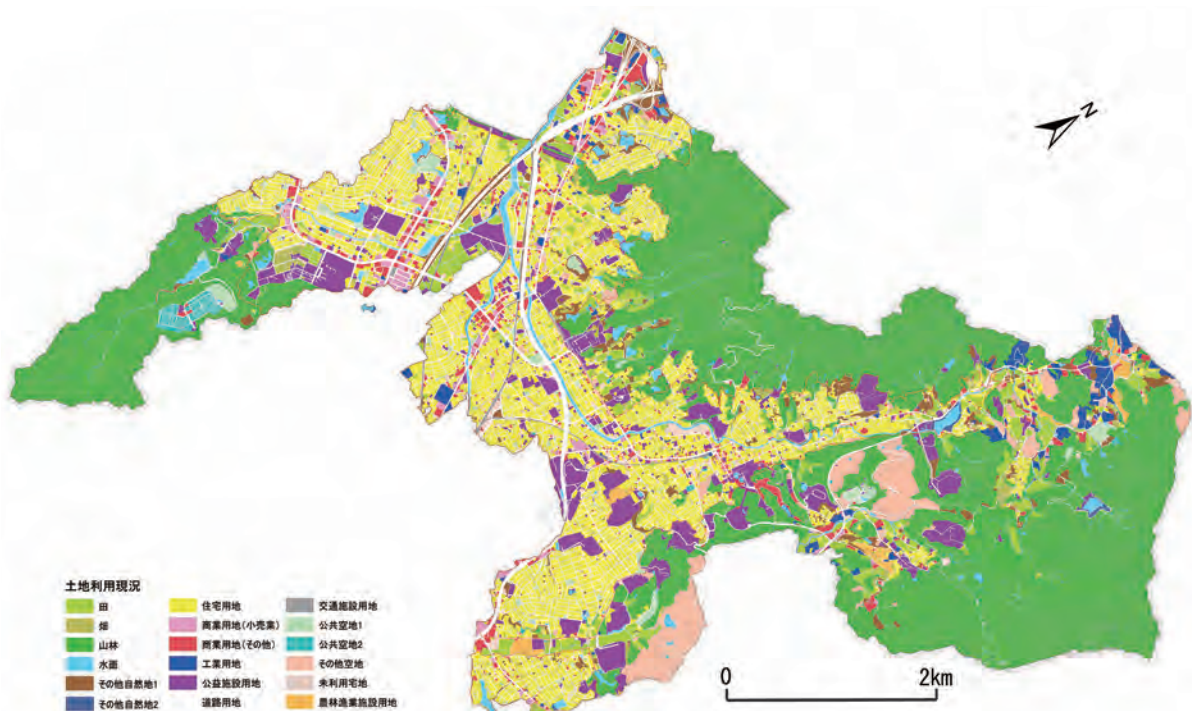
町村施行（明治22年(1889)）以前の村図

(2) 土地利用

戦前までの太宰府は、近世から続く太宰府天満宮の門前町と農村集落であったが、福岡都市圏という立地から、昭和 20 年代後半から福岡市のベッドタウン化が進み、国分や通古賀^{とおのこが}の県営住宅や鉄道の路線駅に比較的近い平坦地の開発から始まり、その後、四王寺山麓など周辺丘陵部へ拡大してきた。特に、昭和 40 年代後半から太宰府で初めて下水道を備えた都府楼団地が造成されたのをはじめ、国道 3 号整備と合わせて南東部の高雄の丘陵地では、複数の開発が行われ丘陵のほとんどが宅地へと変化した。昭和 50 年代から平成 10 年代にかけて、観世音寺地区、佐野地区、通古賀地区^{とおのこが}と区画整理が実施された。近年では坂本地区などの丘陵部や各地区にわずかに残る田畑の宅地開発が進んでいるが、土地利用の割合はあまり変わっていない。



土地利用の割合 (資料：太宰府市の概要)

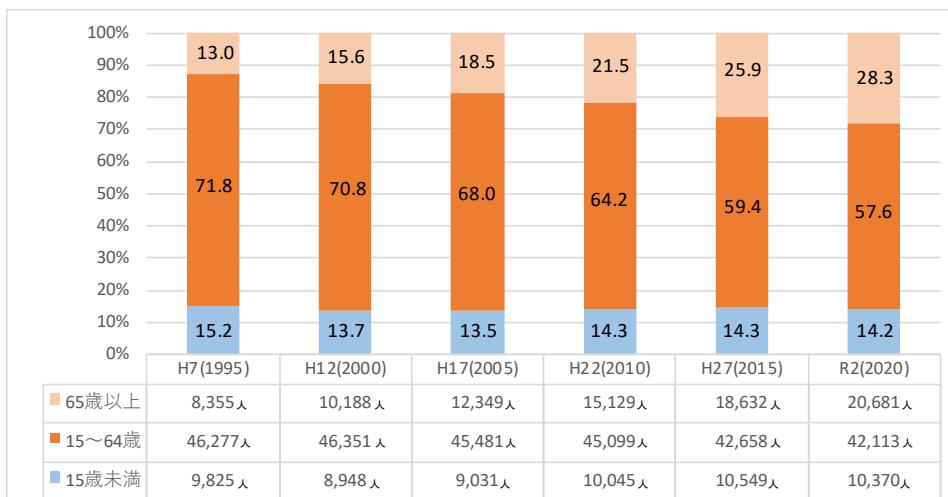


土地利用現況図 (2017年) (資料：都市計画基礎調査)

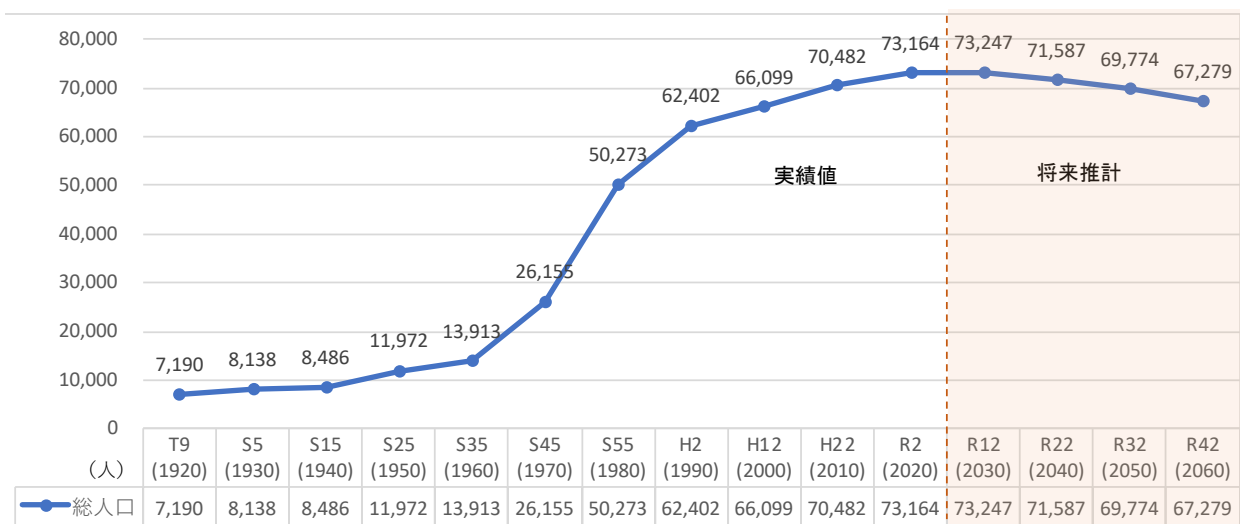
(3) 人口動態

本市は福岡都市圏の住宅都市として、昭和40年代から人口増加の一途を辿ってきた。人口動態は社会増加が自然増加を上回る傾向にあり、福岡都市圏からの流入が主な要因であった。その当時の宅地開発に伴う人口の急増期と比較すると、昭和60年以降、増加数は落ち着きを見せ、平成に入ってからには微増傾向である。その内訳は、65歳以上の高齢人口の増加が目立ち、15歳未満は平成12年(2000)以降微増傾向であるのに対し、15～64歳の減少傾向が続いている。また、令和3年(2021)末の高齢化率は28.0%で、特に古い宅地開発地では世代交代が図られず、第一世代だけが残り高齢化率が40～50%に達している地域も出てきている。

国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、本市の総人口は今後令和7年(2025)をピークにその後減少することが見込まれている。



太宰府市の3世代人口の推移（資料：国勢調査、年齢不詳は含まない）



太宰府市の人口推移

(資料：国勢調査、太宰府市まち・ひと・しごと創生総合戦略(まちづくりビジョン)(第2期)、推計は社人研推計準拠)

(4) 交通機関

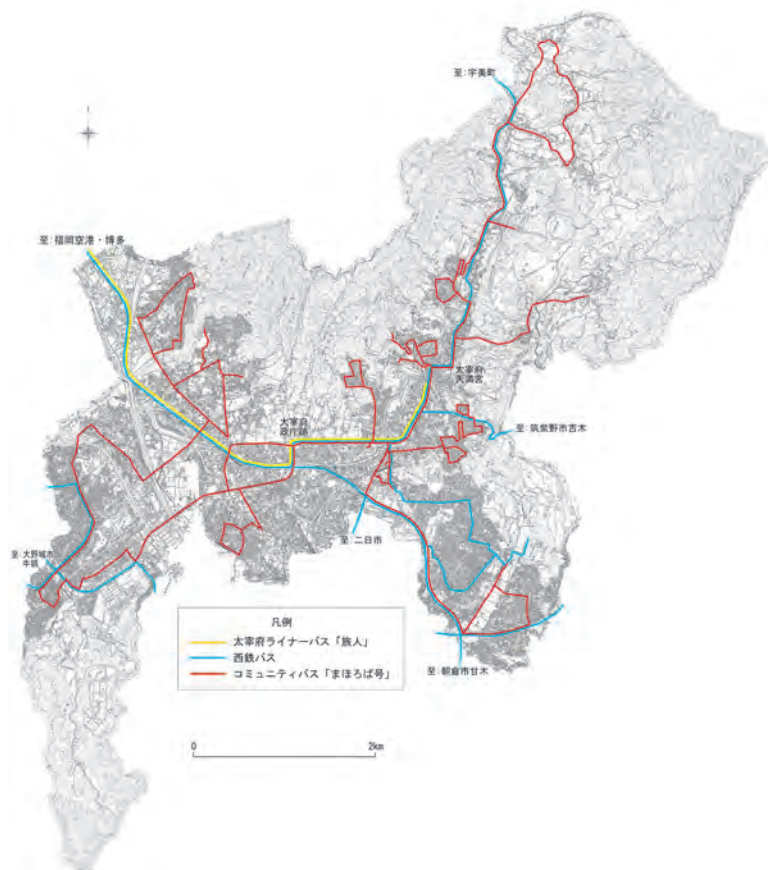
本市は北部九州と中南部九州を連結する位置にあり、鉄道や道路網が北西―南東方向に発達している。

道路は、九州自動車道が市西部を横切り、北西部に太宰府インターチェンジが置かれ、市域における路線長は3km程である。インターチェンジの1日平均出入台数は70,200台（平成26年度、NEXCO西日本資料）で、九州でもっとも利用されるインターチェンジである。一般道路は国道3号（6.5km）と県道11路線（23.6km）が主要な幹線道路である。市道の路線数は1764あり、その総延長は325.7kmである（数字は令和2年（2020）10月1日）。

鉄道は、九州旅客鉄道（以下、JR）と西日本鉄道（以下、西鉄）が通っている。JRは鹿児島本線都府楼南駅の1駅、西鉄は福岡天神大牟田線の都府楼前駅、太宰府線の五条駅、太宰府駅の3駅があり、令和元年度の1日平均乗降人員はそれぞれJR都府楼南駅1,168人（JR九州本社広報室資料）、西鉄都府楼前駅7,163人、西鉄五条駅5,748人、西鉄太宰府駅12,139人（西鉄本社広報室資料）となっている。特に西鉄太宰府線は、沿線にある高校や大学への通学や、福岡市などへの通勤として市民の日常の



太宰府市の主な交通網



太宰府市のバス路線図

移動手段となっているほか、太宰府天満宮や九州国立博物館へ訪れる観光客の移動手段として多くの人が利用している。

また、市内の移動には、平成10年(1998)から太宰府市コミュニティバスまほろば号が運行されており、1日平均約1,725人(令和元年度)に利用されている。



西鉄太宰府駅と
太宰府ライナーバス「旅人」

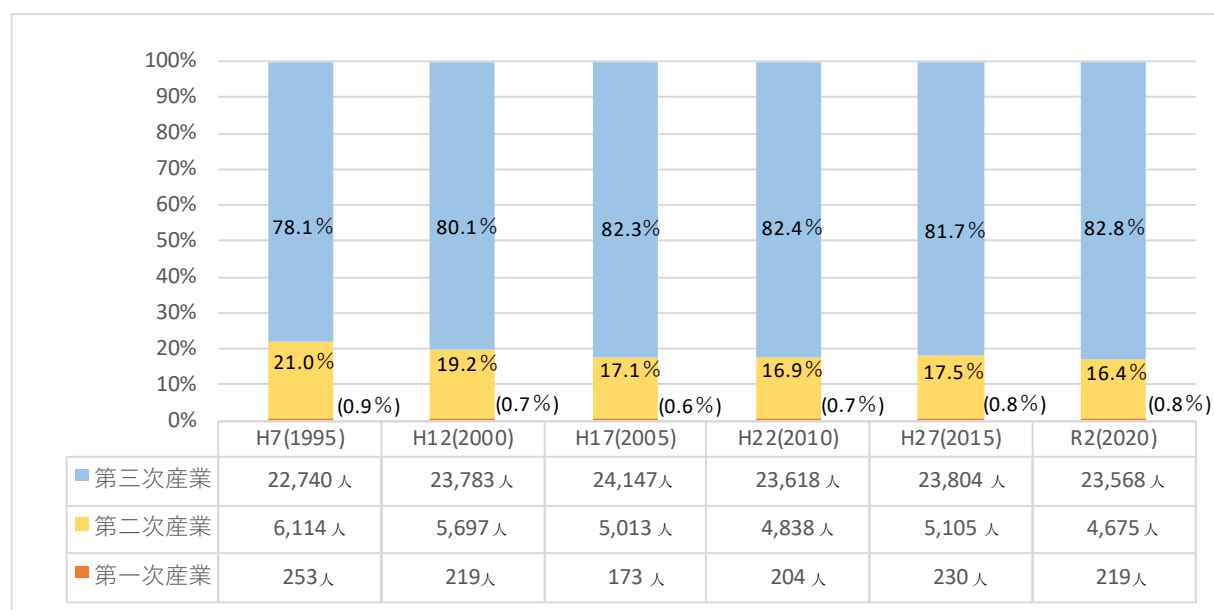
また、平成26年(2014)から、「太宰府ライナーバス旅人」の運行が開始され、これまで乗り換えが必要だった太宰府市とJR博多駅エリアや福岡空港国際線間を直通するようになり、利便性が向上した。令和元年(2019)度の利用者数は71.8万人(西鉄事業者事業本部資料)となっている。

(5) 産業

近代までの太宰府は都市近郊の農村であったが、太宰府天満宮門前での旅館・観光も生業となっていた。

現在の太宰府市の就業構造は第三次産業への特化が顕著で、本市には県内屈指の数の観光客が訪れており、観光客を対象にした観光産業が太宰府天満宮門前を中心に成立している。商店の構成をみるとチェーン店が増えるなど、客層、商店構成、商品構成の多様化が進んでいる。

一方で、第一次産業の占める割合は極めて低く、農村的色彩はかなり弱まっている。また、人口規模に比して高校(4校)や大学・短大(5校)が多く立地しているのも特徴である。

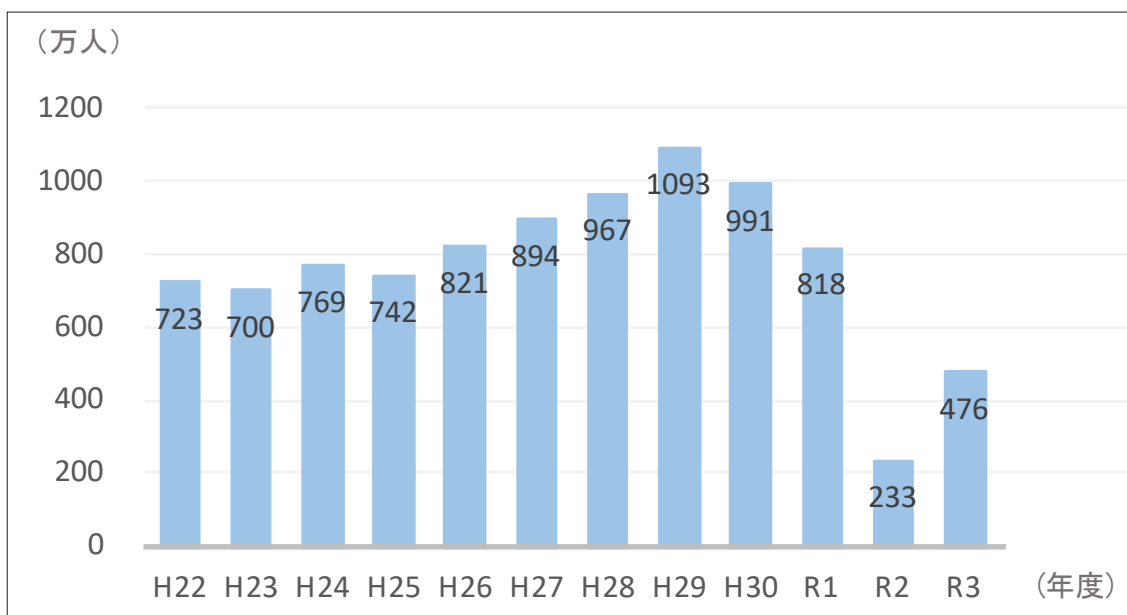


産業別就業人口割合の推移(資料:国勢調査)

(6) 観光

本市は、太宰府天満宮門前町を中心に観光産業が盛んで、県内屈指の数の観光客が訪れ、その数は年々増加傾向にあった。近年は、東アジアを中心に海外から訪れる人々が増加し、平成29年(2017)度には1093万人と一千万人を超えていたが、令和2年(2020)度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で233万人と激減したものの、令和3年(2021)度には476万人と回復傾向にある。

観光客が訪れる場所は、太宰府天満宮・光明寺・観世音寺・戒壇院・坂本八幡宮・竈門神社などの社寺、大宰府政庁跡・水城跡などの史跡、九州国立博物館・大宰府展示館などの文化施設で、全国的に有名な福岡県屈指の観光地として県外はもちろん、近隣の人々の人気スポットにもなっている。また、宝満山や四王寺山などは、福岡都市圏にある手頃な山として、四季を通じて登山客で賑わっている。

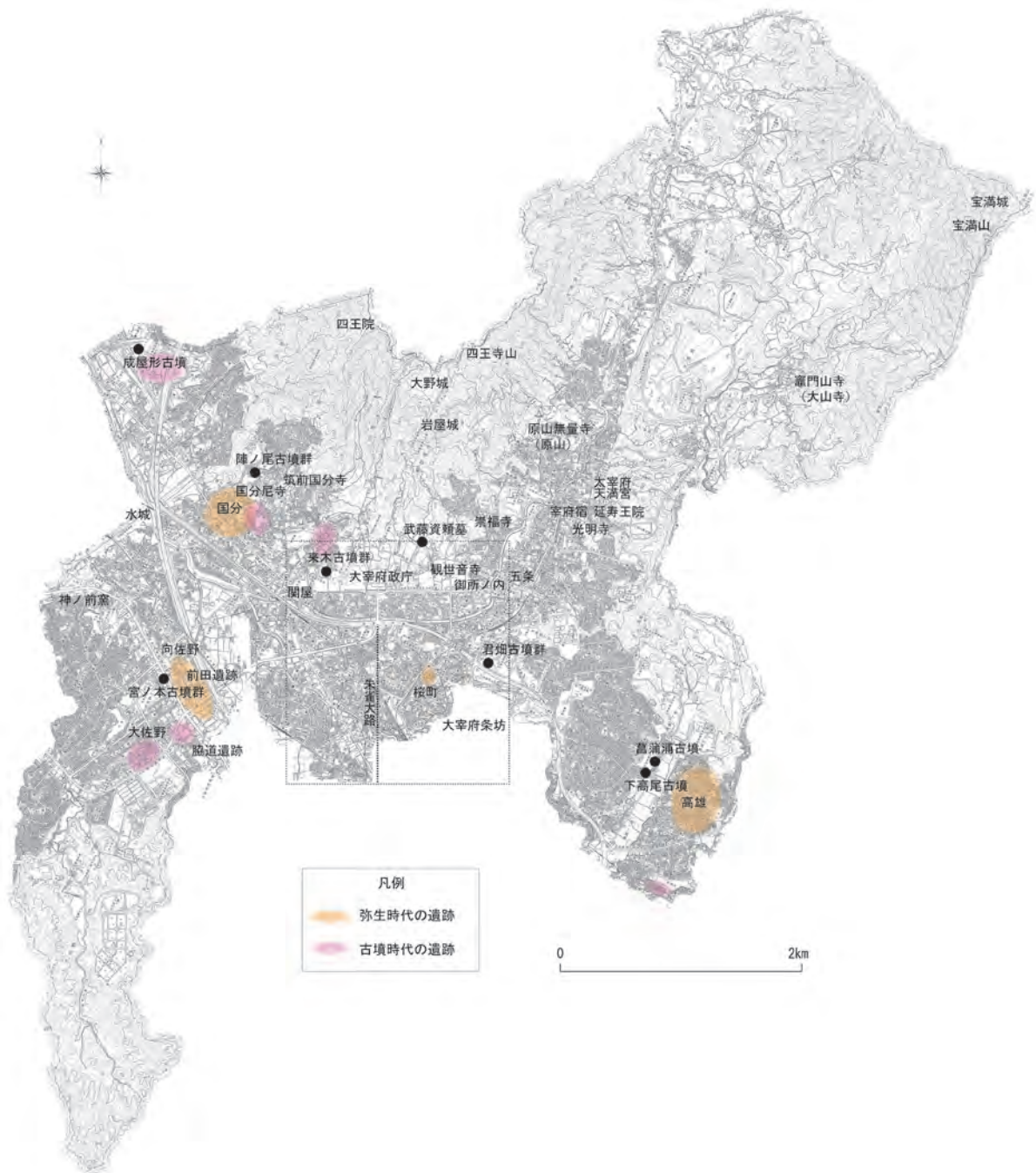


年間観光客数の推移(万人) (資料:『太宰府市の概要』)



参拝者や散策者で賑わう太宰府天満宮境内と大宰府政庁跡

3 歴史的環境



主な遺跡や史跡の分布

(1) 歴史

①先史時代（旧石器～古墳時代）

本市は、^{げんかいなだ}玄界灘に面した福岡平野と^{ありあけかい}有明海に面した筑紫平野をつなぐ二日市地峡帯と呼ばれる狭い谷平野の北側に位置し、北に^{しおうじやま}四王寺山、北東に^{ほうまんざん}宝満山、南に^{せふりさんち}脊振山地東端の^{てん}天拝山に囲まれている。この盆地内は、今から9万年前におこった熊本県阿蘇山の大噴火による火砕流で埋まるが、その後、河川の浸食作用を受け、火砕流は低丘陵として残されている。この低丘陵上では、後期旧石器時代・縄文時代早期の石器や土器が出土しており、

この頃から人の活動が始まったことがうかがえる。また、四王寺山や宝満山など山麓のほか平坦地でも、旧石器時代のナイフ形石器や三稜尖頭器などの狩猟具・解体具がわずかに出土している。遺跡としては大佐野の脇道遺跡で台形石器を主体とする後期旧石器時代の石器群がまとまって出土している。縄文時代も引き続き山裾や低丘陵上で遺物が散発的に発見されているが、本格的な集落が展開するのは弥生時代からである。



脇道遺跡の旧石器

弥生時代前期の集落は、市西部の前田遺跡で確認され、市中央部桜町一帯の丘陵では貯蔵穴や落とし穴が確認されている。弥生時代中・後期になると向佐野・大佐野・国分・高雄付近で集落が営まれ、国分や高雄では、集落近くに甕棺墓群が形成されている。国分や高雄の丘陵部には青銅器が埋納され、国分の集落遺跡からは細形銅戈や中広銅矛鑄型など権力の存在を示唆するものが出土している。



前田遺跡の竪穴住居跡

古墳時代になると弥生時代に引き続き、国分・大佐野・高雄に中小規模の集落・古墳が形成され、古墳時代前期から中期の割竹形木棺を内部主体とする円墳（菖蒲浦、下高尾、宮ノ本）が築造されている。また、5世紀中頃には、福岡平野を見渡す丘陵に帆立貝形前方後円墳の成屋形古墳が築造される。6世紀以降、四王寺山や高尾山の裾部に円墳（陣ノ尾、来木、君畑）が築造されるが、大規模な群集墳と呼べる状況は示していない。太宰府地域では古墳時代を通して大規模な集落が形成されるような活発な活動は窺えない。一方、吉松の神ノ前2号窯から7世紀初め前後の須恵器とともに発見された瓦は、須恵器工人により製作された初期のものであり、福岡市博多区的那珂遺跡で使用されていたことが判明した。



成屋形古墳

このように太宰府市内の先史時代の集落は、福岡平野と筑後平野の中間にあり、その2つの地域で展開された在地勢力の緩衝地帯であったと考えられている。

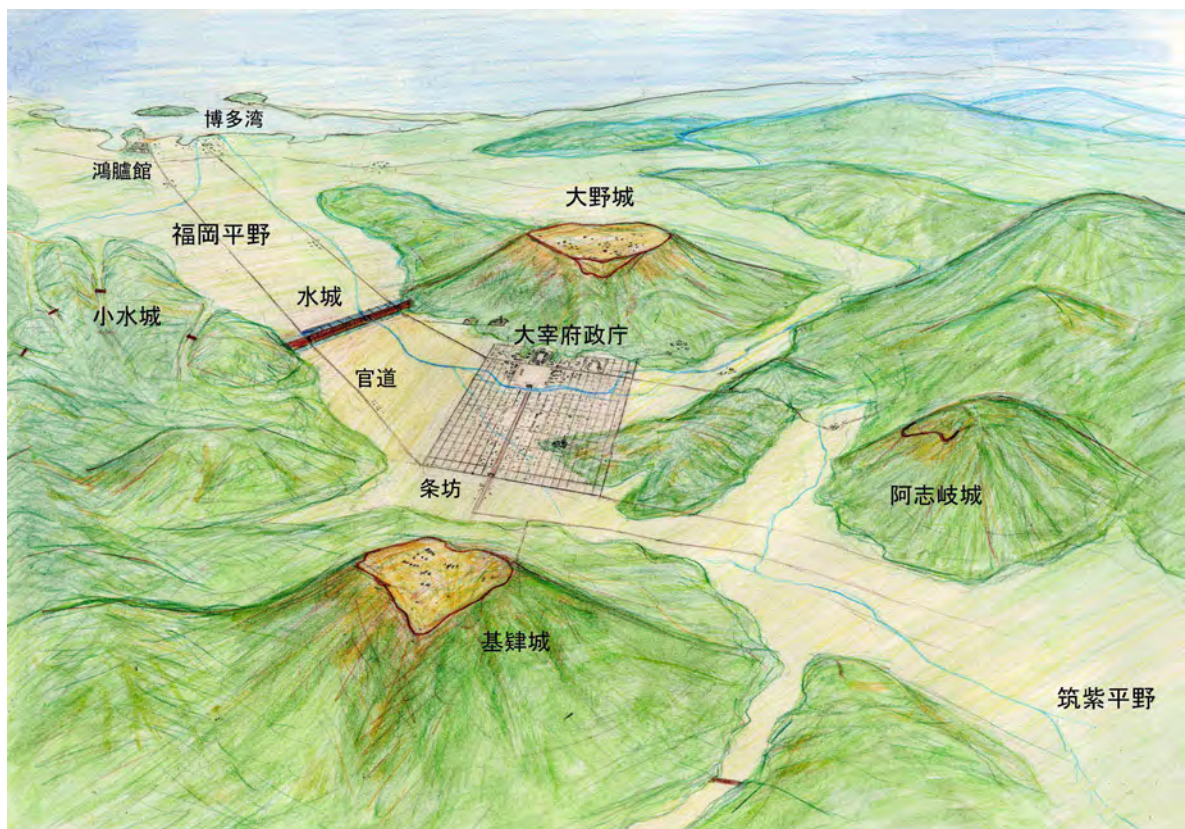


神ノ前窯跡出土の瓦

②古代（飛鳥～平安時代）

7世紀初め頃、後漢以来中国統一を果たした唐が拡大政策のもと高句麗遠征を行い、朝鮮半島の情勢が不安定化した結果、斉明天皇6年(660)に朝鮮三国の一国・百済は唐に滅ぼされた。百済と親交のあったヤマト朝廷は、その復興支援のため斉明天皇自ら筑紫へ遷り、中大兄皇子(後の天智天皇)が救援軍を派遣したが、天智天皇2年(663)白村江の戦いに敗退した。この東アジアとの対峙が大きな転換点となり、日本は律令制に基づく古代国家建設の歩みをはじめめる。そして朝廷は福岡平野と筑紫平野を結ぶいわゆる二日市地峡帯の北辺に「大宰府」を置いた。これが本市の名前の由来となった。朝廷は、白村江敗戦後に亡命百済貴族らを大宰府に派遣し、国防の最前線として、天智天皇3年(664)に水城を、天智天皇4年(665)に大野城と基肄城を築き、大宰府を軍事的、政治的拠点として位置づけた。

7世紀後半頃から大野城が築かれた四王寺山の麓に官衙群(各種官庁)が造られ、8世紀の大宝律令によって、古代最大の地方官衙である「大宰府」が名実ともに成立した。令の規定では、大宰府は九州島の北辺にあって西海道を統括し、外交の窓口や辺境防備を担うと共に遣唐使・遣新羅使や、外国使節、商人らが往来する外交・交易の拠点にもなった。その繁栄ぶりは『続日本紀』神護景雲3年(769)10月条に「人物殷繁、天下之一都会也(人と物があふれていて、我が国有数の都会である)」と記されている。大宰府の官衙群は、東西約700m、南北約250mの範囲に配され、その中心に大宰府政庁がある。水城や大野城



古代大宰府のイメージ

などの防衛施設で囲まれた平地には、都と同じく碁盤目状に区割する条坊が整備された。「大宰府条坊」は、観世音寺や宇佐神宮の土地所有に関する平安時代中～後期の記録にみられる条坊表記から、中央大路（朱雀大路）を境に西を右郭、東を左郭と呼称し、一区画約90m四方の碁盤目状に南北22区画、東西20区画あり、全体で2km四方の広さがあったと想定されている。古代の地方での計画的都市が7世紀から12世紀にわたり長期間存続した希有な例であり、現代の太宰府市街の姿にも大きな影響を与えている。現在の太宰府天満宮神幸式の経路はどんかん道と呼ばれ、太宰府天満宮から榎社を往復するものであるが、これも条坊を踏襲したものである。大宰府関連の施設として、博多湾沿岸には外交使節を迎える鴻臚館などが置かれた。往来のための道路も整備され、特に鴻臚館から大宰府に至る道路は新羅使など海外使節の通路と考えられ、幅10m程の道路（官道）がほぼ直線で敷設され、水城西門を通過し大宰府条坊の南辺で朱雀大路に接続していた。

また、大宰府政庁の東側には、天智天皇が筑紫で亡くなった斉明天皇供養のため建立を発願した観世音寺があり、天平18年(746)にはその落慶供養が行われた。同寺には天平宝字5年(761)に唐僧鑑真が伝えた正統な戒律・授戒作法にしたがって東大寺に建立された戒壇院にならい、西海道諸国の僧の授戒を担当する西戒壇が置かれ、「府の大寺（大宰府の大寺院）」としての地位を不動にした。また、現在国宝に指定されている梵鐘は、京都妙心寺の梵鐘と似ており、同じ鋳型で造られた兄弟鐘と考えられる。妙心寺の梵鐘には文武天皇2年(698)に筑前国糟屋郡（評）で鋳造されたことを示す刻銘があり、観世音寺の梵鐘も同時期に造られたと考えられる。天平13年(741)、仏教による鎮護国家を目的とした国分寺建立の詔が出され、筑前国分寺・国分尼寺が、政庁の北西部に建立された。その後新羅との関係悪化により、宝亀5年(774)に新羅からの呪詛を打ち払う鎮護国家祈祷の寺として四王寺山頂部に四王院が建立され、その山腹には、四王院の別院として天安2年(858)に円珍の弟子華台坊により原山無量寺（原八坊）が建立されたと伝えられている。



大宰府の関連施設である鴻臚館跡（福岡市）



大宰府と鴻臚館を結ぶ官道跡



筑前国分寺跡

宝満山の西麓にはかまどやま だいせんじ竈門山寺（大山寺）があった。『扶桑略記』には延暦22年（803）に「最澄和尚は大宰府竈門山寺において、渡海の四船（遣唐使）の平達（航海の安全）のために、檀薬師仏四軀を敬造す」と記されている。また、大宰府に左遷された菅原道真が、延喜3年（903）に没し、数年後その墓所に門弟のうまさけのやすゆき れいびよう味酒安行が靈廟を建築した。その後延喜年中（901～923）に靈廟から発展して安楽寺が創建されたのが、太宰府天満宮の始まりと伝えられている。その後、安楽寺（天満宮）は観世音寺をも凌駕する新興私寺勢力となっていた。



原山無量寺跡

大宰府には、都から多くの官人が赴任し、都から先進的な文化がもたらされた。奈良時代に編纂された『万葉集』（20巻、約4500首）には筑紫に関する歌が380首ほど収められている。大宰府には大宰帥大伴旅人・筑前国守山上憶良を中心にのちに万葉集筑紫歌壇と呼ばれる人々が集まり、天平2年（730）には大伴旅人邸において大陸渡来の梅花を愛でる雅宴（梅花の宴）がひらかれ、「梅花の歌三十二首」が詠まれた。



万葉歌碑

平安時代になっても、大宰府に関連した和歌、歌物語、漢詩などが多く作られた。和歌では「染川」「竈門山」「苺萱の関」などが歌枕として登場する。歌物語では「伊勢物語」や「大和物語」に「檜垣媼」など太宰府を題材とした話が掲載されている。また、「菅家後集」には菅原道真が大宰府で詠んだ漢詩38編が収められている。

③中世（鎌倉～安土桃山時代）

律令国家は平安時代に大きく変化したが、大宰府を中心とした政治の仕組みは中世（鎌倉・室町時代）へも変容しながら存続していたため、大宰府の官職（帥など）は任命され続けた。鎌倉時代の太宰府は、あまのとおかげ むとうすけより天野遠景や武藤資頼など鎌倉幕府の鎮西奉行が居住し、古代以来の大宰府機構と関わって九州支配をおこなっていた。11世紀後半に廃絶した大宰府政庁は再建されず、政治的中心は観世音寺の東にある小字「御所ノ内」に移ったと考えられる。特に武藤氏は大宰府機構の少式を継ぎ、少式氏と呼ばれるようになった。13世紀



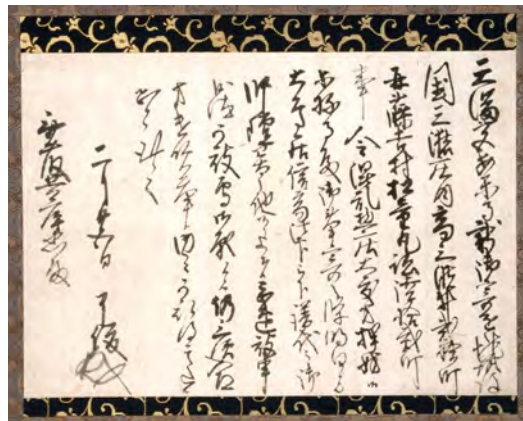
武藤資頼墓（左）

後半の蒙古襲来後、弘安7年(1284)に幕府が博多にいわゆる鎮西特殊合議訴訟機関を置いた。これを契機に政治的な機能の多くが大宰府から博多に移っていくことになる。そして、永仁年間(1293～1299)に鎮西探題を博多に設置したことにより、大宰府は九州の政治的中心という位置づけを徐々に喪失していったが、依然大宰府機構は文書を発給するなどの機能を有していた。

鎌倉幕府の滅亡とともに、太宰府は諸勢力による争奪戦の舞台となった。元弘3年(1333)尊良親王が四王寺山東麓の原山に陣を敷いたのをはじめ、肥後の菊池武敏、足利尊氏らが次々に太宰府に入る。太宰府で挙兵した尊氏は京都を制圧して室町幕府を開くが、その後も南北朝の動乱が続いた。南朝勢力の中心であった懐良親王は正平16年(1361)に太宰府入りし征西府が成立したとされる。一方、北朝方は今川了俊を九州探題として下向させ、応安5年(1372)に太宰府を奪回した。その後、大内氏が、その没落後は毛利氏と大友氏が争いながら太宰府を含めた筑前支配を行った。

中世には、観世音寺や安楽寺(天満宮)など古代以来の寺院に加えて、崇福寺や光明寺などの新興禅宗寺院が増加し、政治的中心が博多に移った後も、宗教都市としての性格を保ち続けた。宝満山麓の大山寺は博多綱首(博多に居住した宋の商人)と関係をもち、日宋貿易に関与していることが知られる。観世音寺戒壇院での授戒も古代から引き続き行われていた。また、石塔や磨崖仏の造営も活発に行われた。このような宗教的高揚のなかで、太宰府の社寺への参詣が広がったと考えられる。特に天満宮安楽寺に参詣した貴族や文人は、社頭で和歌や連歌を詠むことが多かった。文明12年(1480)の飯尾宗祇や永正14年(1517)の宗碩の太宰府参詣は連歌師による参詣の代表的なものである。

産業も盛んで、太宰府天満宮の近くには米屋・



今川了俊書状 (個人蔵)



横岳崇福寺五輪塔埋納遺構



岩屋磨崖仏



岩屋城跡

いものや こまものや あいものや こうや かじや ろくざ
鋳物屋・細間物屋（小間物屋）・相物屋・紺屋・鍛冶屋からなる六座と呼ばれた商工業集
団の組織が生まれた。この六座が奉納した芸能の伝統を引き継ぐ「竹の曲」は、いまま太
宰府天満宮の秋の神幸式大祭にて奉納されている。また、連歌を詠むために太宰府天満宮
を訪れる者も多く、文化的にも興隆した。

戦国時代末期には、四王寺山にあった岩屋城や宝満山山頂近くにあった宝満城の攻防に
代表されるように、市中も戦乱に巻き込まれ、天正6年（1578）には天満宮安楽寺が、天
正14年（1586）には崇福寺が焼失したのをはじめ、山麓を占めていた寺院などは存続でき
ない状況であった。

④近世（江戸時代）

現在の太宰府市域は江戸時代には福岡藩領であり御笠郡に属していた。宰府宿と街道筋
にはまち並みが連なっていたが、他は農村であった。藩主黒田長政が慶長7年（1602）に
実施した検地の結果を記したとされる『慶長年中調各村別石高帳』には、北谷村、内山村、
宰府村、観世音寺村、坂本村、国分村、水城村、通古賀村、片野村、吉松村、向佐野村、
大佐野村の12ヶ村が記載され、近代に引き継がれていった。

太宰府天満宮およびその周辺は天正年間に兵火によって灰燼に帰していたが、天正19
年（1591）に小早川隆景によって本殿が復興され、文禄元年（1592）には神幸式が再興され
た。太宰府天満宮門前町は街道に直接つながっていなかったが、藩の宿に指定され、天
満宮の門前付近が宰府宿となった。宰府宿は太宰府の盆地状の平地の北東方向に延びる楔
状の平地に展開し、博多から日田へ向かう日田街
道からは現在の関屋交差点が追分となり参詣道
を
通
つ
て
宿
へ
到
る。
小
倉
か
ら
長
崎
へ
向
か
う
長
崎
街
道
か
ら
は
現
筑
紫
野
市
の
山
家
宿
か
ら
天
満
宮
南
の
溝
尻
に
至
る
道
が
あ
り、
北
は
宇
美
町
か
ら
の
只
越
を
越
え
て
山
上
（
三
条
）
に
至
る
道
で
結
ば
れ
て
い
た。
ま
た、
二
日
市
へ
は
五
条
か
ら
榎
社
を
経
由
し
て
行
く
「
宰
府
榎
木
寺
道
」
（
『
戸
部
文
書
』
）
が
あ
っ
た。
宿
の
出
入
口
で
あ
る
「
構
口
」
は
そ
の
経
路
ご
と
に
高
橋
口、
五
条
口、
溝
尻
口、
山
上
（
三
条
）
口
が
設
け
ら
れ
た。
宰
府
宿
に
は
大
名
の
寄
宿
所
で
あ
る
「
御
茶
屋
」
は
存
在
せ
ず、
藩
主
が
立
ち
寄
つ
た
際
の
宿
泊
は
天
満
宮
宮
司
邸
で
あ
る
延
寿
王
院
で
あ
っ
た。
宿
内
は
天
満
宮
周
辺
の
社
家
町
街
区、
門
前
に
あ
た
る
現
在
の
西
鉄
太
宰
府
駅
周
辺
の
旅
宿
街
区、
現
在
の
五
条
交
差
点
付
近
の
商
職
人
街
区
な
ど
お
お
よ
そ
の
職
能
に
よ
る
棲
み
分
け
が
見
ら
れ、
社
家
町
内
に
代
官
所
（
代
官
屋
敷、
造
営
奉
行
所
）
な
ど
の
藩
の
公
的
施
設
が
置
か



江戸末期の関屋
（『筑前名勝画譜』国立公文書館蔵）



高橋口跡

れていた。

太宰府天満宮の門前町には、藩に指定された江戸後期の問屋である大野屋があり、藩主や他藩大名の参詣に際して人馬の手配を行っていた。また、享和元年(1801)の紀行文『筑紫紀行』によれば大野屋は酒や飯を提供する宿屋でもあった。この他、天保5年(1834)2月の記録(『竹森文書』)には、笹屋、松屋、泉屋、呼子屋、鶴賀屋、日田屋、博多屋、長門屋、角屋、仕立屋、若松屋などの宿屋が見られる。春の鶯替え、鬼すべ、秋の神幸祭などの四季の歳事にも多くの民衆が参集するようになった。この時代の太宰府は旧来の名所の他、「太宰府十二景」などの新名所も成立し、それらの情報が地元の絵師による絵画などにより広く知られるようになった。名物としての「梅ヶ枝餅」や「木鶯」などもこの時期に現れている。

幕末には、京都から逃れた三条実美を筆頭とする五卿が太宰府天満宮に滞在し、宰府宿には、中岡慎太郎、西郷隆盛、坂本龍馬など討幕を目指す勤皇の志士が集まった。このため太宰府は、「明治維新策源地」と言われている。五卿は地元文化人とも交流し、書画などの作品とともに逸話が残されている。

⑤近現代(明治時代～)

明治政府による神仏分離は太宰府天満宮や門前、宝満山へ大きな影響を与えた。神社の別当・社僧と呼ばれた僧侶は還俗が命じられ、神主・社人として神道に転じるよう布達され、太宰府天満宮からも仏教関係のものは取り払われた。社僧の多くは神社を離れることとなった。そのため山上(三条)の原八坊に起源をもつ僧坊が解体していった。また、馬場を中心とする社家屋敷も分割されていった。さらに、明治35年(1902)の御神忌一千年祭に合わせて、二日市との間に太宰府馬車鉄道が開通し、大町に太宰府駅ができると日帰り客の増加と比例して宿泊客は減少し、参道には旅館を改業した土産物屋・飲食店・商店が増加した。天満宮周辺の変化と対照的にその他の集落は近世と変わらぬ農村集落の雰囲気を持っていた。しかし、昭和30年代になると県道31号(通称5号線)を皮切りに、九州自動車道の開通や国道3号バイパスなど新たな道路が整備され、太宰府天満宮へ車による参詣者が押し寄せるようになり、天満宮



太宰府十二景に描かれた岩踏川



五卿遺跡(延寿王院)



絵葉書にみる明治後半の太宰府天満宮参道

門前には駐車場が増加していくこととなった。また、福岡都市圏の住宅都市として開発の波も押し寄せ、それまでの農村風景から一転することとなった。

自治体としての太宰府は、明治の初めには12ヶ村であったが、明治22年(1889)に北谷・内山・宰府3ヶ村が合併し太宰府村となり、観世音寺・坂本・国分・水城・通古賀・片野・吉松・向佐野・大佐野の9ヶ村が合併し水城村となった。その後、

太宰府村は明治25年(1892)に町制を施行した。昭和30年(1955)には太宰府町と水城村が合併して太宰府町が発足し、昭和57年(1982)に市制を施行した。

平成31年(2019)4月1日、『万葉集』を典拠とする元号「令和」が首相官邸より発表され、本市がその元号ゆかりの地として注目されることとなり、多くの人々が太宰府を訪れることとなった。

こうした中、連綿とつづいてきた太宰府地域の歴史を下敷きに、現代の本市を特徴づけるもととなる試みも相次いでなされている。近世以降黒田藩や太宰府天満宮などが携わり保存してきた大宰府跡は、明治時代になると政庁正殿跡の基壇に地元の有力者や学者により石碑が建立され本格的顕彰が行われるようになった。明治6年(1873)の「太宰府博覧会」は、西日本でも早い時期に行われた博覧会だったが、こうした取組みを経て、明治26年(1893)には地元有志により歴史資料を研究・展示する「鎮西博物館」建設計画が検討された。こののち明治32年(1899)に岡倉天心おかくらてんしんが九州に博物館が必要と説いた。この時の人びとの思いはのちに博物館誘致へとつながり、平成17年(2005)に九州国立博物館が開館した。これにより行政・市民共々歴史文化を再認識することとなり、本市も市内全域を博物館と見立てた「太宰府市まるごと博物館構想」を掲げた。平成22年(2010)には、全国的にも珍しい「市民遺産」制度ができ、官民協働で様々な文化遺産を守り育てる取り組みが始まった。



元号「令和」発表直後の坂本八幡宮周辺の賑わい



九州国立博物館

(2) 関わりのある人物

やまのうえのおくら
山上憶良 (660 ~ 8世紀前半)

奈良時代初期の歌人。大宝元年(701)に遣唐少録に任ぜられ、翌年渡唐。神亀3年(726)頃に筑前守に任ぜられる。大宰府では大伴旅人らと交流し、天平4年(732)頃には任期を終えて帰京。『万葉集』第5巻におさめられている「貧窮問答歌」は著名。



山上憶良の万葉歌碑(学校院跡)

おおとものたびと
大伴旅人 (665 ~ 731)

奈良時代の貴族・歌人。左将軍、中務卿、中納言などを経て、神亀4年(727)頃に大宰帥として、妻・大伴郎女を伴って赴任するが、まもなく妻を亡くす。天平2年(730)大納言に任ぜられ帰京する。『万葉集』には70余首の歌が収録され、その多くが大宰帥時代のものである。



大伴旅人の万葉歌碑(大宰府政庁跡)

すがわらのみちざね
菅原道真 (845 ~ 903)

菅原氏は奈良時代以来代々学者の家柄で、幼少期より学問の才に優れ、元慶元年(877)には式部少輔・文章博士に任じられたが、仁和2年(886)に讃岐守となる。その後宇多天皇の信任を得て、政治の中枢部に関与し、寛平6年(894)に遣唐大使に任ぜられたが、唐の国情不安と衰退を理由に遣唐使停止を建議した。昌泰2年(899)には右大臣となったが、左大臣藤原時平の讒言により、昌泰4年(901)大宰権帥に左遷され、延喜3年(903)2月25日大宰府で没し、現在の太宰府天満宮の地に葬られた。その詩文に『菅家文章』『菅家後集』が伝わる。



菅原道真像(太宰府天満宮蔵)

おののよしふる
小野好古 (884 ~ 968)

平安時代中期の公卿で、曲水の宴の創始者と伝えられる。天慶3年(940)藤原純友の乱鎮圧のため、右近衛少将で追捕凶賊使に任ぜられ、博多で撃退した。天慶8年(945)から康保2年(965)まで2度にわたって大宰大弐となっている。



小野好古が始めたと伝わる曲水の宴
(写真提供:太宰府天満宮)

うまさけのやすゆき

味酒安行 (? ~ 964)

菅原道真が京にあるときからの門弟。祖は武内宿禰の三男たけのうちのみくねへぐりのつぐのすくねである。昌泰4年(901)道真が左遷された際、それに従い筑紫に下った。延喜3年(903)に道真が没すると葬送を行い、葬送の牛車が動かなくなった地を墓所とした。その後、霊廟を建立したのが太宰府天満宮の始まりという(『安楽寺草創日記』永禄2年(1559))。その後も追善供養あいらくじ そうそうにつき えいろくに務め百余歳で没したと伝えられる。



味酒安行を祀る安行神社

もろ尼御前 (平安前期)

大宰府に左遷された菅原道真の世話したという伝説が残る麴屋の老婆で、浄妙尼とも呼ばれている。もろ尼御前が麴の飯を梅の枝に添えて道真に差し入れたものが、今に伝わる梅ヶ枝餅の始まりとされている。榎社境内の片隅には、もろ尼御前を祀る浄妙尼社がある。



もろ尼御前を祀る浄妙尼社

すがわらのすけまさ

菅原輔正 (925 ~ 1009)

平安時代中期の文学者で、太宰府天満宮の常行堂、宝塔院、中門廊、廻廊を造営し、太宰府天満宮の火祭り鬼すべを始め人物と伝えられている。文章得業生、右少弁、東宮学士、もんじょうとくごうしょう うしょうべん とうぐうがくし文章博士に累進し、もんじょうはかせ円融天皇・えんゆう かざん花山天皇2代の侍読を勤めた。天元4年(981)大宰大式に任ぜられた。長徳2年(996)参議・てんげん だざいのだいに ちやうとく式部大輔を兼ね正三位となった。しきぶたいふ



菅原輔正が始めた鬼すべ

ふじわらのこれのり

藤原惟憲 (963 ~ 1033)

平安時代中期の公卿。菅原道真の謫居の地である南館に、榎社の前身である浄妙院じょうみょういんを建立した人物。因幡守いなばのかみ、甲斐守かゐのかみなどの地方官を歴任し、治安3年(1023)大宰大式に任ぜられた。その任期を終えたとき、九国二島(筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・薩摩・大隅・日向・壱岐・対馬)の財物を奪い尽くしたとも評された。



榎社

おおえのまさふさ

大江匡房 (1041 ~ 1111)

平安時代後期の漢文学者。太宰府天満宮神幸式を始めた人物と伝えられる。幼少期より才能を発揮し、治暦3年(1067)東宮学士に任じられ、後三条天皇・白河天皇・堀河天皇の3代に渡って侍読を勤めた。その後弃官を経て寛治2年(1088)に参議となり、承德元年(1097)に大宰権帥となった。天永2年(1111)には大蔵卿に任ぜられたが、まもなく没した。平安時代後期の漢文学者としては傑出しており、『江家次第』『本朝続本粹』などの著作が伝わる。



大江匡房が始めた太宰府天満宮神幸式

こばやかわたかかげ

小早川隆景 (1533 ~ 1597)

戦国・安土桃山時代の武将。毛利元就の三男。太宰府天満宮本殿を再建した人物。天文13年(1544)に小早川家の養子となり、天正13年(1585)四国平定の戦功により豊臣秀吉より伊予を与えられた。天正15年(1587)には九州平定の戦功により、伊予を転じて筑前1国、筑後・肥前2郡を与えられ、筑前名島に城を築いた。文禄の役に従軍。家督を養子の秀秋に譲り備後に隠退した。



小早川隆景が居城とした名島城跡

かめいなんめい

亀井南冥 (1743 ~ 1814)

江戸時代中期の儒者で、都府楼跡に建つ「太宰府碑」の碑文を撰文した人物。筑前国早良郡姪浜生まれ。大坂の永富独嘯庵らに師事し、福岡に帰郷後は医業の傍ら儒学を講じた。安永7年(1778)7代藩主黒田治之により儒医に選ばれ、天明3年(1783)新設された西学問所(甘棠館)の学頭となった。



亀井南冥肖像

(財) 亀陽文庫能古博物館蔵

さいとうしゅうほ

齋藤秋圃 (1772 ~ 1859)

江戸時代後期の筑前を代表する絵師。京都生まれ。円山応挙や森狙仙を師と仰ぎ、上方の風俗絵師として名を上げ、文化2年(1805)秋月藩の御用絵師となる。文政11年(1828)に隠居し、その前後に太宰府に移り住み、『博多太宰府図屏風』など太宰府に関係する作品を残している。秋圃のもとでは、江戸末期から明治期の太宰府の絵師吉嗣梅仙や萱島鶴栖らが学んだ。



齋藤秋圃自画像

たかはら ぜんしちろう
高原善七郎 (1787 ~ 1872)

大宰府政庁正殿跡中央に「都督府古趾碑」^{ととくふ こしひ}を建立した人物。高原家7代目和作美清の次男として生まれる。23歳で御笠郡下大利触^{しもおおり ぶれ}の諸用聞^{しよようきき}となり、33歳で観世音寺村庄屋^{てんぼう}、天保4年(1833)には立明寺村触大庄屋、^{けいおう}慶応3年(1867)81歳のときには御笠郡大庄屋相談役となった。



高原善七郎肖像
個人蔵

画像提供：太宰府市文化ふれあい館



太宰府市 PR キャラクター、左から「れいわ姫」「おとものタビット」「旅人のたびと」

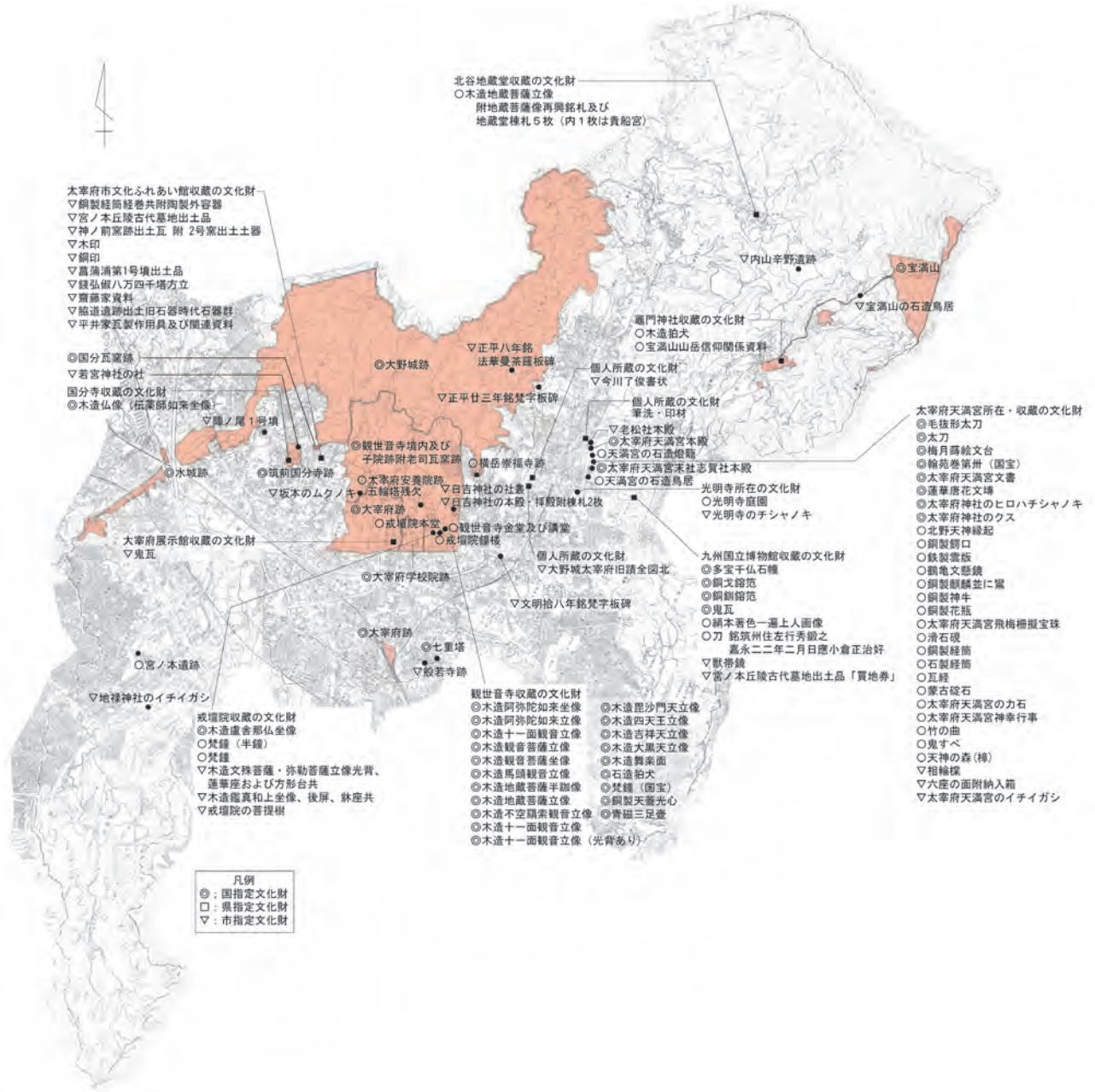
4 文化財等の分布状況

本市には、古代大宰府が設けられた関係から、古代大宰府に端を発する遺跡や社寺、それらにまつわる資料が多く残されている。しかし、太宰府は災害や戦乱が多かった関係で、木造建造物の多くが失われ、中世以前のは太宰府天満宮境内にわずかに残るのみである。よって、太宰府天満宮門前町や旧集落に残る住宅や蔵など歴史的な木造建造物のほとんどが近世・近代の建造物である。しかしながら、太宰府は石材が豊富で、中世戦乱の供養の石塔などが多く造られたこともあり、市内全域の路傍や宅地の片隅に石塔・石神・石碑などの石造物が多く残されている。

このような状況で、本市には、国、福岡県、太宰府市の指定文化財が総計 114 件（令和 4 年 12 月現在）存在している。その内訳は国指定文化財 45 件、県指定文化財 35 件、市指定文化財 34 件である。その内容は市域の 16% を占める大宰府関連史跡のほか、太宰府天満宮や観世音寺といった社寺建築とそこに収蔵されている彫刻、絵画、工芸品が多く、全体として市域の北側に多く所在する。また、指定物件の年代を概観すると、古代大宰府から続く本市の歴史性を反映して古代や中世の文化財が多く指定されている。

区分		国指定	県指定	市指定	合計	
有形文化財	建造物	4	5	4	13	
	美術工芸品	絵画		2	1	3
		彫刻	19	2	3	24
		工芸	5	11		16
		書跡・典籍	1			1
		古文書	1		1	2
		考古資料	5	6	13	24
	歴史資料			1	1	
民俗文化財	有形の民俗文化財		2	1	3	
	無形の民俗文化財		3		3	
記念物	遺跡	8	2	3	13	
	名勝地		1		1	
	動物・植物・地質鉱物	2	1	7	10	
合計		45	35	34	114	

太宰府市の指定文化財件数（令和 4 年 12 月現在）



太宰府市の指定文化財分布状況（令和4年12月現在）

(1) 国指定文化財

◆太宰府天満宮本殿〔重要文化財（建造物）〕

天正19年(1591)に小早川隆景が再建したものの、
五間社流造の檜皮葺の建物で、正面に大唐破風の
向拝が1間、左右両側にも同じような唐破風の車寄
を付けている。内陣の臺股や外陣の透かし彫りなど
細部に桃山時代の華やかさを残す。



太宰府天満宮本殿

◆太宰府天満宮末社志賀社本殿〔重要文化財（建造物）〕

太宰府天満宮の太鼓橋横にある境内現存最古の建物
で、長祿2年(1458)の再建と伝えられているが、近世
の修理・改造も多くみられる。建物は正面1間、側面1
間の入母屋造の檜皮葺で、正面には千鳥破風と向唐破風
の向拝が一間付いている。



太宰府天満宮志賀社本殿

◆七重塔〔重要文化財（建造物）〕

古代寺院般若寺があったとされる丘陵に所在する花崗岩製の
七重塔。後補の相輪を除いた基礎からの高さは3.02mを測り、
塔身には金剛界四方仏の梵字が刻まれている。その造りから鎌
倉時代後期の造立と考えられている。



七重塔

◆大宰府跡〔特別史跡〕

古代律令制下にあつて外交をつかさどり、西海
道諸国を統括した大宰府の中樞である。重要政務
儀式が執り行われていた政庁を中心に周囲に蔵司
などの官衙を配する。政庁は大きく3期に分かれ、
7世紀後半の掘立柱建物群に始まり（Ⅰ期）、8
世紀初頭には礎石建物に建て替えられ（Ⅱ期）。
その後、天慶4年(941)の藤原純友の乱によって
焼失したが、すぐにⅡ期とほぼ同規模の建物が再
建された（Ⅲ期）。しかし、11世紀後半代には政
庁はその機能を失い、現在見るような礎石のみの
姿になったと考えられている。



大宰府政庁跡

◆水城跡〔特別史跡〕

天智天皇2年(663)の白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に敗れた日本が国土防衛のた

め築造した土塁である。『日本書紀』天智天皇3年(664)の条に「於筑紫、築大堤貯水、名曰水城(筑紫に大堤を築きて水を貯えしむ。名づけて水城という)」と記されている。土塁の規模は全長約1.2km、基底部幅約80m、高さ約9mで、土塁の内外には濠が設けられ、それらを繋ぐ木樋も確認されている。また、土塁の東西には門が設けられ、官道が通り抜けている。



水城跡

◆^{おおのじょうあと}大野城跡〔特別史跡〕

『日本書紀』には、白村江の戦い敗戦後の天智天皇4年(665)に百済の亡命者である憶礼福留、四比福夫の指揮のもと築造された城と記され、平安時代初めまで使われていた。四王寺山の尾根に沿って土塁を巡らし、谷部には石垣が築かれている。現在確認されている城門は9ヶ所で、城内各所には礎石を伴った建物群が7ヶ所点在し、建物は計約70棟に及んでいる。



大野城跡水ノ手口石垣

◆^{ほうまんざん}宝満山〔史跡〕

宝満山は太宰府市の北東にある。古代には国家的祭祀や遣唐使などの航海安全祈願が行われた。中世以降は修験道の山として栄え、近世には信仰の山として発展した。その信仰は今も竈門神社などに連綿と引き継がれている。現在山中には祭祀跡や坊跡、社寺に關係する堂舎跡など古代から近世に至る遺構が良好に残る。



宝満山の堂舎跡(第42次調査)

◆太宰府神社のクス〔天然記念物〕

天神の森と呼ばれる太宰府天満宮のクスノキの社叢のうち、巨樹2本が天然記念物に指定されている。社殿西側の最大木は樹高28.5m、幹周11.7mで、重量感のある優美な樹形を保っている。本殿後ろに並ぶ夫婦樟は大きく根上がりし、樹高17.1m、幹周は10.6mと4.4mを測る。



太宰府神社のクス

(2) 県指定文化財

◆観世音寺金堂及び講堂〔県指定有形文化財（建造物）〕

観世音寺が誇っていた大規模な伽藍^{がらん}は、度重なる災害や戦火で失われ、現在残る金堂と講堂は、江戸時代前期に再建されたものである。2棟とも入母屋造の本瓦葺^{いりも やぶくり}で、金堂は桁行5間、梁間4間。講堂は桁行3間、梁間2間で裳階^{もこし}がめぐり外観重層をなしている。



観世音寺金堂（左）、講堂（右）

◆戒壇院本堂〔県指定有形文化財（建造物）〕

切石の基壇上に建てられ、下層は5間、上層は3間の重層入母屋造^{いりも やぶくり}で、屋根は本瓦葺、正面には1間の向拝^{ごはい}が付く。寛文9年（1669）頃に黒田家臣鎌田昌勝が建立し、延宝8年（1680）に豪商天王寺屋^{えんぼう}了夢^{うらりょう む}が改築したものと伝わる。



戒壇院本堂

◆天満宮の石造鳥居〔県指定有形文化財（建造物）〕

太宰府天満宮の太鼓橋の手前に建てられている鳥居。花崗岩で造られた明神鳥居で、建立年月日は定かではないが、鎌倉時代末期から室町時代に造られたと推測されている。



太宰府天満宮の石造鳥居

◆光明寺庭園〔県指定名勝〕

昭和32年（1957）、昭和を代表する作庭家である重森三玲^{しげもり みれい}によって作られた。庭園は本堂を挟んで表庭と本庭に分かれ、白砂の州浜模様、立石を中心とした石組、多数のカエデといった諸要素がバランスよく配置されている。



光明寺庭園

◆太宰府天満宮神幸行事〔県指定無形民俗文化財〕

大宰府で亡くなった菅原道真^{すげはら のりま}を偲び、康和3年（1101）に、大宰権帥大江匡房^{おほの まさむね}によって始められた。道真の神霊を載せた神輿^{みこし}が、道真在りし日の配所であった榎社に秋分の日の前日夜半に下り、一晚過ごして、秋分の日午後に再び太宰府天満宮へ上る御神幸である。



太宰府天満宮神幸行事

◆鬼すべ〔県指定無形民俗文化財〕

新暦1月7日夜に行われる悪鬼を祓う除災行事である。寛和2年(986)に太宰大貳菅原輔正が始めたといわれ、元旦から神職は齋戒沐浴、祓の行事を行い、満願の夜、氏子たちが鬼を攻める燻手と鬼を守る鬼警固に分かれ、太宰府天満宮境内の鬼すべ堂前で火を焚き攻防を繰り返す。



鬼すべ

◆竹の曲〔県指定無形民俗文化財〕

天満宮に属した商家六座(米屋・鋳物屋・細間物屋・相物屋・紺屋・鍛冶屋)の子孫が代々伝える芸能で、中世の田楽を今に伝えるものとされる。ささら舞と扇舞(稚児1名)と締太鼓・笛(大人7名)で構成される。9月に行われる太宰府天満宮の神幸行事の祭中に奉納される。



竹の曲

(3) 市指定文化財

◆相輪櫓〔市指定有形文化財(建造物)〕

相輪櫓とは五重塔などを簡略化した柱と相輪からなるもので、この相輪櫓は、享和2年(1802)、菅原道真900年大祭にあたり、博多の商人らによって発願奉納されたものである。鋳造は博多鋳物師の山鹿氏によるもので、中央柱は高さ6m、脇柱は高さ2.4mである。明治の神仏分離令の影響で、現在境内に所在する仏教色の強い建築物としては唯一のもので、全国的にも数少ない建築物として貴重である。



相輪櫓

◆老松社本殿〔市指定有形文化財(建造物)〕

太宰府天満宮本殿の北側にあり、三間社流造の銅板葺である。柱頭に出組を置き、中備に墓股を配す。軒は二軒で繁垂木。妻飾は二重虹梁大瓶束で、二重虹梁の間に板墓股を配す。縁は三方簀子縁を巡らす。細部の建築様式から17世紀後半に建立されたと推測されている。



老松社本殿

◆^{ひよしんじや}日吉神社本殿・^{むなふだ}拝殿 附 ^{棟札}棟札〔市指定有形文化財（建造物）〕

観世音寺北側の丘陵上に所在する。本殿は一間社流造、銅板葺で、造りが丁寧で、^{かえるまた}臺股や^{きばな}木鼻など各部材を良好に残し、細部の造りから17世紀後半の建立と推測される。拝殿は正面3間、側面2間、^{いりも}入母屋造妻入、^{やづくり}棧瓦葺で、^{さんがわらぶき}墨書から正徳4年（1714）の建立とわかる。市内で唯一残る江戸期の拝殿を備えた本殿として貴重である。



日吉神社本殿・拝殿

◆宝満山の石造鳥居〔市指定有形文化財（建造物）〕

宝満山山中にあり、一の鳥居と呼ばれる。宝満山の^{しゅうず}衆頭（山伏のリーダー）である^{ひらいしぼうこうゆう}平石坊弘有により延宝7年（1679）に建立されたことが刻銘よりわかる。宝満山で江戸期に建立された建築物のほとんどが、^{はいぶつきしゃく}廃仏毀釈によって破壊された。この鳥居は宝満山に残る数少ない江戸期の建造物で、建立年代や施主が明確な鳥居としては市内で最も古いものである。



宝満山の石造鳥居

◆^{ほんにやじ}般若寺跡〔市指定史跡〕

般若寺は、^{はくち}白雉5年（654）に筑紫大宰帥蘇我日向が^{つくしのだざいのそちそがのひむか}孝徳天皇の病氣平癒を祈って建立したものとされている。諸説あるが、その般若寺は現在の筑紫野市にある^{とうのはる}塔原廃寺で、大宰府郭内が整備される過程で、現在の般若寺跡に移転したと推定されている。調査では一辺11.9mの基壇が確認されたが、現在周辺は宅地化され、塔跡の一部と塔心礎が残る。



般若寺跡

◆^{しゃそう}日吉神社の社叢〔市指定天然記念物〕

日吉神社は観世音寺の北側にある。参道の石段両側にはクスノキの大木が並び、社殿西側には市内屈指の大木であるスダジイ（幹周3.8m）やイチイガシが繁茂する。この社叢は北部九州の典型的な常緑広葉樹の森であり、市内で数少ない自然形態を維持する鎮守の森として貴重である。



日吉神社の社叢

(4) 主な未指定文化財

◆太宰府天満宮^{らうもん}楼門

慶長年間^{けいちやう}建築の楼門が明治37年(1904)に焼失したため、明治神宮などの設計に携わった安藤時蔵らの設計により大正3年(1914)に再建された(社記・棟札より)。構造は入母屋造^{いりも やづくり ひわだぶき}檜皮葺の三間三戸門で、本殿側から見ると楼門だが、逆から見ると二重門に見えるという珍しい造りとなっている。また、屋根の形は梁に束を立てて母屋桁を支える伝統的な和小屋で整えながら、構造はトラスで構成する混合構造となっている。



太宰府天満宮楼門

◆光明寺山門

一間一戸、切妻造、本瓦葺、平入りの四脚門である。親柱は円柱、控柱は面取角柱、親柱上には三斗^{みつと}枳肘木^{わくひじき}、中備^{なかぞなえ}に大板^{かえるまた} 葺股^{かえるまた}、控柱上には大斗^{だいと}花肘木^{はなひじき}、妻には大虹^{だいこうりやう} 梁^{だいこうりやう} 板^{いた} 葺股^{かえるまた}がある。虹梁^{こうりやう}の絵様や木鼻などから18世紀前半建築と推測され、市内で最も古い門である。



光明寺山門

◆観世音寺^{かんぜおんじ}宝蔵^{ほうぞう}

昭和34年(1959)に観世音寺復興事業の一環として建築されたもの(昭和34年(1959)7月9日付け朝日新聞)。宝蔵は高床の鉄筋コンクリート造、寄棟造の本瓦葺^{むね}で、棟には鴟尾^{しび}をあげる。腰壁は瓦の木端積である。舟肘木^{ふなひじき}で支える軒天井を吹付仕上、板軒風の軒を打ち放している。伝統的な様式を踏まえながら、精度の高い型枠工事がなされている。



観世音寺宝蔵

◆松屋^{まつや}

太宰府天満宮参道の大町地区にあり、江戸期以来、松屋と号して旅館と醤油屋を営んでいた。主屋は平入りの木造三階建、屋根は3階が妻入りの入母屋造^{いりも やづくり} 棧瓦葺で、2階には下屋を四周に巡らし、外壁は大壁造である。経年感と座敷意匠から江戸末期建築と推測され、3階については小屋棟木の墨書から明治12年(1879)の増築とわかる。内部は当初の姿をよく留め、幕末の志士が出入りした由緒に相応しい風格を備えている。



松屋

◆吉嗣家資料

太宰府で町絵師として活躍した吉嗣家は、秋月藩の御用絵師だった齋藤秋圃さいとうしゅうほに師事した吉嗣梅仙よしつぐばいせん（1817～96）に始まり、子の拝山はいざん（1848～1915）、孫の鼓山こざん（1879～1957）の三代にわたって、多くの作品を残している。吉嗣家に残る資料は、書画や印章はもちろん画材や手紙なども残り、絵師たちの活動や交流を知ることができる貴重な資料である。

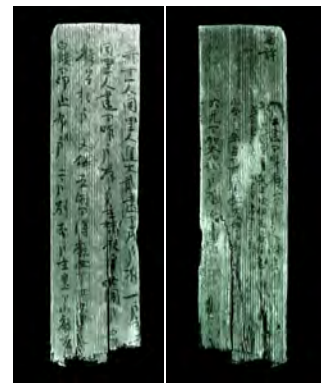


吉嗣家資料（個人蔵）

◆戸籍・計帳関係木簡（「嶋評戸口変動記録木簡」）

平成24年（2012）に国分松本遺跡で出土した木簡で、縦31cm、横8.2cmの板材の両面に、人名や続柄・身分などが墨書されている。木簡には「嶋評しまのこおり」（現在の糸島市）や「進大弑しんだいに」（天武天皇14年（685）の冠位制度）の文字が書かれていることから、685～701年の間のものであることがわかる。

なお、この木簡は、大宝律令以前の戸籍・計帳制度の存在を証明する国内唯一の資料である。



戸籍・計帳関係木簡

◆成屋形古墳

福岡平野を見渡す低丘陵上に築造された全長36.5mの帆立貝形の前方向後円墳で、太宰府市唯一の前方向後円墳である。墳丘周囲と墳丘頂部には円筒埴輪えんとうはにわが配され、家形埴輪も出土している。墳丘には葺石ふきいしが葺かれ、南に開口する石室は横穴式石室であるが、内部は未調査である。



成屋形古墳

◆藍染川

藍染川（染川）は、天満宮の神官と京女の梅壺うめつぼとの恋物語である謡曲「藍染川」の伝説の舞台であり、中世から歌枕の名所として知られていた。「さいふまいり」が流行った江戸時代後期の地誌類には、藍染川の中にある梅壺侍従蘇生碑うめつぼ じじゅう そせいひと背後の岩山（靈岩れいがん）がセットで描かれているものが多く、江戸時代から藍染川と靈岩は一体的な景観とみなされており、名所的価値を有している。



藍染川（手前）と靈岩（奥）

(5) 伝統工芸・特産品

◆木鷺^{きうそ}

木鷺は、ホウノキやコシアブラを加工し鷺を形作った民芸品である。羽の部分^{のみ}を鑿で巻き上げて、薄くカールするには高度な技術が必要である。昭和 58 年 (1983) に福岡県知事指定特産民芸品に登録された。平成 10 年 (1998) に木うそ保存会が発足して、現在は太宰府天満宮神職と保存会で製作している。1 月 7 日の夜には木鷺を使った^{うそ}鷺替え神事が行われる。

また、「太宰府の木うそ」として太宰府市民遺産に認定されている。



木鷺

◆梅ヶ枝餅^{うめがえもち}

もち米とうるち米から作る生地で餡を包み、焼き上げた素朴なお菓子で、「南館の菅原道真に、もろ尼御前^{に ごぜん じょうみょう}（浄妙尼）という老婆が梅の枝とともに差し上げた」などの伝承が起源とされている。太宰府天満宮門前町の名物として親しまれている。



梅ヶ枝餅

(6) 太宰府市民遺産

市民遺産とは、市民と地域または市が伝えたい太宰府固有の物語、その基盤となる文化遺産、そして、文化遺産を保存活用する育成活動を総合したものである。市民遺産は、住民・事業者・行政機関の代表者で構成される景観・市民遺産会議により認定される。この制度は平成22年(2010)10月に始まり、令和5年(2023)2月時点で17件の市民遺産が認定されている。

第1号	太宰府の木うそ	第10号	太宰府の梅上げ行事
第2号	八潮の千燈明	第11号	高雄の自然と歴史
第3号	かつてあった道 四王寺山の太宰府町道	第12号	太宰府悠久の丘～太宰府メモリアルパークからの眺望
第4号	芸術家 富永朝堂	第13号	太宰府をうたう♪全11曲 (作曲・唄 岩崎記代子)
第5号	万葉集つくし歌壇	第14号	梅香苑夏まつり子どもみこし
第6号	太宰府における時の記念日の行事	第15号	四王寺山の三十三石仏
第7号	隈廩公のお墓	第16号	宝満山のヒキガエル
第8号	太宰府の絵師 荻島家	第17号	竹の曲
第9号	荻萱の関跡とかるかや物語		

太宰府市民遺産一覧(令和5年2月現在)



四王寺山の太宰府町道



芸術家 富永朝堂



万葉集つくし歌壇



隈廩公のお墓



荻萱の関跡とかるかや物語



高雄の自然と歴史



太宰府悠久の丘



梅香苑夏まつり子どもみこし



四王寺山の三十三石仏

(7) 日本遺産

日本遺産は、地域に点在する有形・無形の文化財をパッケージ化した、わが国の文化・伝統を語るストーリーを国が認定するものである。関係省庁の協力のもと、歴史的魅力にあふれた文化財群を地域主体で総合的に整備・活用し、また世界に戦略的に発信することにより、地域の活性化を図るものである。

平成27年(2015)4月、初の日本遺産が全国で18件誕生し、太宰府市の地域の歴史を語るストーリー「古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～」が認定された。その後、大宰府の観点でこの地を捉え直すこととし、令和2年(2020)6月には、代表自治体が太宰府市から福岡県に代わり、周辺6市町の構成文化財11件を加えた広域型(シリアル型)となった。「古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～」は「世界とつながる「西の都」」「外国使節を迎える都」「筑紫に花咲く文化」「先進文化の集積」の大きく4部から構成される。筑紫に置かれた大宰府は朝廷が外交・交易を行うために設けた「西の都」であり、それは百済の宮都・唐の宮都にならって築かれ、東アジアの先進文化と日本の文化とが行き交う場所であったことから、その遺産が筑紫の地の随所にみられ、日本を代表する古都のひとつとして、人々を魅了しているというストーリーをとりまとめている。太宰府市内においては、以下の19の文化遺産が構成文化財となっている。

市内に所在する日本遺産の構成文化財

1、特別史跡 大宰府跡	8、史跡 宝満山	14、大宰府条坊跡
2、特別史跡 大野城跡	9、国宝 観世音寺梵鐘	15、官道
3、特別史跡 水城跡	10、太宰府天満宮	16、軍団印出土地
4、観世音寺・戒壇院	11、太宰府天満宮神幸行事	17、般若寺跡
5、史跡 筑前国分寺跡	12、太宰府天満宮の伝統行事	18、南館跡
6、史跡 大宰府学校院跡	13、万葉集筑紫歌壇	19、太宰府の梅
7、史跡 国分瓦窯跡		

市外に所在する日本遺産の構成文化財

20、基肆城跡【筑紫野市・基山町】	26、牛頸須恵器窯跡【大野城市・春日市】
21、阿志岐山城跡【筑紫野市】	27、牛頸須恵器窯跡出土ヘラ書き須恵器【大野城市】
22、次田温泉(二日市温泉)【筑紫野市】	28、御笠の森【大野城市】
23、塔原塔跡【筑紫野市】	29、善一田古墳群【大野城市】
24、天拝山【筑紫野市】	30、裂田溝【那珂川市】
25、杉塚廃寺【筑紫野市】	